
ジェネラル

巨太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジェネラル

【Nコード】

N4762F

【作者名】

巨太郎

【あらすじ】

鉄兵がバイトしている会社は掃除洗濯の代行から車の修理に浮気調査、更には悪霊退治に暗殺業務まで幅広くなんでも行っている。それぞれの分野にはエキスパートがいて「ジェネラル」と呼ばれている。鉄兵も高校生ながら「ジェネラル」の称号をもっている鉄兵の今日の依頼内容は・・・

第一話 憎しみの銃弾 part 1

「また明日な！」

「鉄兵きょうもバイトかよ？最近付き合い悪いな。」

「悪いな、今度埋め合わせはするからさ。」

「おう、また明日な。」

みつるきてっぺい
御剣鉄兵は都内の高校に通う17歳の学生だ。

小さいころに両親をなくし、遠い親戚に当たるかんざきじゅん神崎純
という男に引き取られた。

高校生になって神崎の家を出て高校の近くにあるアパートに一人暮らしを
している。

神崎が家賃は出してくれるといっていたが、神崎が経営している会
社で
バイトとして働いている。

神崎一代で気づいた会社で、地上9階地下2階建ての自社ビルを持
っており
年商は軽く100億は超えているらしい。

仕事の内容は簡単にいうと「何でも屋」だ。

何でも屋の範囲はほんとに幅広く、掃除洗濯などの家事手伝いや

水漏れ修理、洋服の修理、パソコンや車の修理、浮気調査などなど表の仕事だけでも何種類あるかわからない。

しかしこの会社がメインで行っている仕事は超常現象の解決、盗み、殺しなどの裏家業だった。

会社の名は裏世界ではかなり広まっているらしく、どこかの財閥の会長さんやら

時には国から仕事を受けることもあるらしい。

依頼者の依頼内容に応じて「ジェネラル」と呼ばれる人材を一人または複数人送ったり依頼に対応する。

ジェネラルにはランク付けがあり、C↓B↓A↓Sという順にランクが上がっていきランクが上になるほど請求金額があがっていくが、より正確に早く依頼を片付けてくれる。

また依頼内容によっては初めからCランクやBランクのジェネラルでは対応できず、AランクやSランクのジェネラルが赴くこともある。

鉄兵は17歳ながら気功の使い手で、気を固めて相手に飛ばしたり（カメ。メ波みたいなもの）体中に気をまとい防御力を高めたり、傷を回復させたりもできる。また運動神経やその場の判断力もすぐれておりジェネラルのランクとしてはAで登録されている。

高校を卒業したらバイトではなく正社員になるつもりだ。鉄兵としては今すぐにでも正社員になりたかったが

神崎が「高校くらいは出ておけ」というので通っている。しかし実際に通ってみると満更高校生活も悪くなく神埼には感謝をしている。

鉄兵が住む町は、横に長い長方形の形をしており、東西を横切る電車が中央に走っている。

ちょうど町の中心あたりに駅がありその周りがオフィス街になっている。

線路を挟んで北側には商店街や病院や学校や郵便局といったものがあり、南側は主に住宅街となっている。

鉄兵が通っている高校からバイト先の会社のビルまでは歩いて30分位でいける。

鉄兵はビルの正面入り口の自動ドアから中に入っていった。

「陽子さんこんにちわ。今日もお綺麗ですね。」

「鉄兵くんこんにちわ。今日もバイトなの？頑張ってるね。」

今井陽子^{いまいようこ}22歳。この会社の受付嬢の一人だ。

目はパッチリとして二重まぶたで鼻筋も綺麗にとおっている。

唇は綺麗なピンク色で、厚さも薄すぎず厚すぎずといった感じた。

髪は緩やかにウェーブがかかった状態で肩より少し長く伸ばしている。

受付嬢をしているだけあつとても美人だった。

ひそかに鉄兵があこがれている女性だった。

「彼氏いるんだろっな。。。」
「と思いながら正面のエレベーターの前
に立ち上階行きを待った。

第二話 憎しみの銃弾 part 2

俺が働いているこのビルの説明を簡単にしておこう。

1階は受付とロビー、そして依頼人と話をするスペースや医務室がある。

医務室には神崎商事のブラックジャックと呼ばれる凄腕の医者がいるがその男についてはまた今度。

そして地下1階は駐車場で、社員の車や任務で使われるバイクや怪しげな機械なんかも置いてある。

地下2階は研究室で、ここでは怪しげな機械や薬などが開発されている。

まあ俺も機械のいくつかは使わせてもらっているが確かに凄いものばかりだ。

2階3階はトレーニングルームで、ジェネラルたちがそれぞれの腕を磨くための部屋がたくさんある。

4階5階はいわゆる会社のオフィスっぽいで、電話で依頼者と対応したり

簡単な依頼で対応しているものはここで片付けてしまうらしい。

また俺のようなバイト（俺しかいないみたいだけど）が依頼内容を確認したいときは4階にいく。

6階は事務系の部屋で、書類作成したりお金関係の仕事をしている人たちらしい。

ちらっとしか除いたことがないのでわからないが、女性が多くかわ

いい子が何人かいた。

7階は社員食堂やカフェ、あとはライブラリ室にリフレッシュルームがある。
息抜きの間となっている。

8階は何があるかわからない。俺が知っている社員の人も誰も入ったことはなく
また入ることを許されていないらしい。

9階は神崎のいる社長室と秘書室だ。一度いったが高級そうな調度品が並んでいた。

そして屋上にはヘリポートがひとつある。

エレベーターが4階につき、周りにいた社員たちに一通り挨拶もすませ、誰でも使える共有のデスクに座り
そこにおかれているデスクトップの端末に仕事内容を確認するための特殊IDでログインする。

そして今回昼間に携帯電話にかかってきた依頼内容の詳細を確認する。

俺たちが仕事を請けるまでの簡単な流れを説明すると

まずは依頼者から電話または直接この会社まで来て受付担当が依頼内容を細かく聞く。

その依頼内容にあわせて手の空いているジェネラルに連絡をとる。
基本は携帯に連絡するがその場では詳しく語らず会社に来て内容は

確認する。

詳細内容は外部とは完全に遮断されたローカルサーバーに保管されているので

それを見るためには会社にくるしかない。

しかも依頼内容ひとつひとつにパスワードがかかっており、それを受付担当から聞かないと見ることができない。

忘れたら大変なことになるがジェネラルでそんなアホなやつがいるとは思えないので大丈夫だろう。

依頼内容を確認したら、後は依頼内容にそって仕事をするだけだ。

今回の仕事の内容は業界ではナンバー3に入る三嶋建設の社長、三嶋祐三（61歳）のボディガードだ。

ここ数日の間に2回ほど銃で撃たれそうになったらしい。

昼間働いているときは何人かのガードマンと別のジェネラルもボディガードにあたっていたが

いずれも帰宅してから家で狙われているということ、家にいる間のボディガードも頼まれたというわけだ。

基本的にジェネラルは依頼人の裏事情・・・たとえば今回で言えば狙われる理由については一切詮索せず

与えられた仕事だけをこなせばいいといわれている。

鉄兵はそこに疑問は持っていたが神崎の方針なのでとりあえず従っている。

今日の仕事内容を確認した鉄兵は早速三嶋の家に向かうことにした。

会う約束の時間は19時。

現在の時刻は18時30分。

三嶋の家は2つ隣にある町の高級住宅街だ。

「バイクなら十分間に合うな。」

そついうと鉄兵は愛車のバイクを止めてある地下2階へと向かった。

第一話 憎しみの銃弾 part 3

4階からエレベータに乗り込み地下2階へのボタンを押した。

早速3階でとまり「これは各駅停車か？」

とおもったら知っている人物が乗り込んできた。

「こんにちは丸山さん。」

「よう鉄兵。元気そうだな。これから仕事か？」

まるやましげき
丸山茂樹25歳。

研究課の主任の一人だ。

まだ若いが才能はこの会社でもピカイチで
どんな機械物でも直し、発明した物の数は万を超えると豪語してい
たのを聞いたことがある。

「これから隣町までボディガードにいつてきます。」

「そっか、気をつけて行ってこいよ。まあお前なら大丈夫だと思う
が。」

丸山にはオリジナルのバイクや武器を作ってもらって仕事で使っ
ている。

確かにそれもこれも性能は巷で手に入るものより格段にいい。

「そうだ今度でいいけど、今開発中のヘッドギアとソリッドアーマ
ーがっもつすぐ完成するんだ。」

今度使ってやってくれよ。」

「わかりました。じゃあ俺はここで。」

地下1階についたので俺はエレベータを下りた。

「おう、頑張れよ！」

駐車場につくと愛車のバイクにまたがり、キーを挿してエンジンをかけた。

愛車の名は「ジーザス」という。

丸山が作ったバイクでカウル部分にでっかく英語で印刷してある。

高校生の俺がのるバイクということで、色々機能はついているらしいが

基本は400CCの市販品のバイクを少しいじくったものらしい。

まあ俺はこれで十分満足している。

その機能とやらも今は使ったことがなく、あくまでちょっとパワーのあるバイクとしてしか使っていない。

道は車で込んでいたが、間をすり抜け18時55分には三嶋の家についた。

防犯カメラ付の大きな門の前で呼び鈴を鳴らす。

しばらくすると家政婦らしき女の人が出てきて三嶋がいる応接室まで通らされる。

既に三嶋は応接室のソファアの上に短い足を広げて座って待っていた。

後ろには屈強そうなボディガードが二人左右に立っている。

三嶋は鉄兵をみるなり言った

「なんだまだ子供じゃないか。こんなやつで大丈夫なのか？」

鉄兵は一瞬ムツとしたが顔には出さずに逆に笑みを浮かべながら

「後ろにいる木偶の坊を10人雇うよりは役に立つと思いますよ。」
と

2人のボディガードはムツときたようだ。
みるみる顔色が赤くなっていくのがわかる。

「ほほう、たいそうな自身だな。右後ろにいる山崎は私が雇っているボディガードの中でも
1、2を争う強さで空手の使い手だ。どうだ？はなれに道場があるが相手をしてみるか？」

三嶋は俺があきらめると思ったらしい。
後ろのボディガードもニヤついていた。

「俺は構いませんよ。」山崎と呼ばれた男が言った。

「俺も構いませんよ。」鉄兵も言った。

三嶋も山崎も一瞬びつくりした顔をしていたが元の表情に戻る。

「では移動しよう。」山崎の一言でその場の全員が立ち上がり道場に向かう。

はなれといっても家からつながっており、雨が降っていても濡れることはない。

俺は道場の真ん中で精神統一をし、気を高めていった。

山崎は先ほどまでは白いワイシャツに黒いスーツとサングラスといった姿だったが道着に着替えていた。

「死んでもしらんぞ。」山崎はいった。

確かに見た目は首周りも腕回りも胴周りも、足周りも全て鉄兵の2倍以上の太さがあり誰が見ても鉄兵が負けれると思うだろう。

「俺は手加減してあげるからね山ちゃん。さすがに人殺しはやだからね。」

山崎はカチンときたのか「はじめ」の挨拶もなしに襲い掛かってきた。

確かに当たれば凄い攻撃だろう。うなりが聞こえてきそうなパンチだったが鉄兵は難なくかわしていく。

山崎のパンチやキックをかわしながら鉄兵は拳に気を溜めていった。そして山崎が大振りをし一瞬体制を崩した瞬間にミゾ落ちに必殺の一撃を食らわせた。

気を溜めた攻撃はミゾ落ちから波紋のように体中に広がり山崎は口から血を吐くと
前のめりに倒れ動かなかった。

「あれ？手加減したつもりだったのに強すぎたかな？」

三嶋ともう一人のボディーガードの男は呆然としていた。

第一話 憎しみの銃弾 part 4

「さすが神崎のところから送られてきたランクAのジェネラルだな。疑ったりしてすまなかった。」

「確かに俺はまだ17歳ですからね。俺より上の人からみたら生意気なところもあると思うし、
気に障りましたら申し訳ございません。」

「いや、私はお前が気に入ったよ。できれば専属のボディガードになってもらいたいもんだ。」

鉄兵は「考えておきます」というと、道場に倒れている山崎を抱え起こし、

背中から気を送り込んで、気絶していた山崎を蘇生させた。

山崎は最初はボーっとして周りをキョロキョロしていたが、目の前に鉄兵がいるのを確認すると

顔を怒りに染めて襲い掛かろうとしたが、三嶋に止められた。

応接室に戻り、三嶋の対面にあるソファを勧められ座った。

硬くもなく軟らかすぎでもなく絶妙な座りごこちだ。

三嶋の後ろにはスーツ姿に着替えた山崎がバツが悪そうにたっている。

もう一度三嶋から今回のボディーガードの件を聞く。

三嶋は家にいるときに2度、銃で狙われている。

応接室でくつろいでいたときに1回と、寝室で本を読んでいたときに1回。

今は両方ともガラスを防弾ガラスに変えたいが、不安なのは変わらず早く犯人を捕まえてほしいとの事だった。

会社にいるときや、出退勤のときは三嶋専属のボディーガードに守らせている。ガードも厚い。

ガードの薄い自宅でのボディーガードと犯人逮捕が依頼だということだった。

「では早速ガードに入らせてもらいます。」

「うむ、頼んだぞ。」

応接室を出ようとすると30歳くらいの男がいた。

髪とヒゲはボサボサで伸び放題。服は上下ともヨレヨレのトレーナとジーンズ姿。

鉄兵を見るとそそくさと逃げていった。

「あれはわしの息子の祐次だ。32歳にもなって仕事もせずに部屋にこもって何かをやっている。」

あれじゃあ、わしの会社をまかせる事はできん。困ったもんだ。」

鉄兵は三嶋にも色々悩みがあるんだなと思いつつ、三嶋が狙われた日の防犯カメラの録画されたものを

見せてもらった。家の門に1台、外壁に5台、庭に6台、玄関に1台と合計13台ものカメラがあり

建物の周りはほぼ全てカバーしているらしい。

カメラの録画に映っていたのは32歳の息子の祐次と、巡回するボデイガードだった。

特に怪しい人物が外から入ってきたり、犯行後逃げていく姿などは映っていなかった。

録画されたフィルムを解析したが編集された後もなく、あとは遠距離からの射撃も考えたが

三嶋の家に残っている銃弾をみると、中国やロシアなどで流れている改造されたハンドガンタイプのもだった。

今度は実際に自分で庭を見て回ろうと思った。警察が色々調べたらしいが見落としがあるかもしれない。

「はあ、俺こういう捜査みたいのはあまり得意じゃないんだよなあ。」

三嶋の家は門を入ると幅10メートルくらいの道が50メートルくらい続き正面に家屋の玄関がある。

家屋までの道の両脇は色とりどりの花がさく花壇があつたり人間の背丈くらいはある果実の木が植えられている。

そして建物を囲むように外壁があるが、正面以外は家屋と外壁の間は10メートルくらいだ。

そこにも人が隠れられそうな木も植わっているが、逃げずに未だに隠れ続けるのは不可能だろう。

色々歩き回り、あることに気づいた。

あるルートを使えば防犯カメラにまったく映らずに寝室や応接室にいけるのだ。

巡回などでは通らないようなルートだ。玄関からでて5メートルくらいまで門に向かって進む。

そこから門を見ている状態で左側の木の陰に入る。まずここはどのカメラにも映らないだろう。

そして他のカメラは常に左右に動いているので、その動きのタイミングに合わせて

草の茂みや木や岩の陰に隠れながら寝室や応接室を銃で狙えるところまで近づける。

実際に鉄兵はそのルートを歩いてみて、録画された防犯カメラを見てみると

玄関からでたのを最後に鉄兵の姿はまったく映っていなかった。

「外部の犯行ではなく内部のものの犯行だな。」

それならカメラに怪しい人物が映っていないのもうなずけるし、あのカメラに映らない複雑なルートも

よほどこの家に詳しくないとわからないだろう。

そして決定的な証拠としてルート上にタバコの吸殻を発見した。

第一話 憎しみの銃弾 part 5

三島の家でタバコを吸うのは依頼者の三嶋祐三本人と息子の祐次だけだということだ。

息子の祐次が犯人だとすれば、防犯カメラに映らないルートを探し出すことも

可能だろうし、実際に防犯カメラの録画テープをもう一度みると玄関からでてからからすぐに姿を消し、犯行が終わったところにまた玄関に映っていた。

「理由はわからないが確定だろうな・・・」

鉄兵は犯人を伝えるために応接室の三嶋祐三の元に向かった。

「三嶋さん、ちょうど応接室を狙える草の茂みの中でタバコの吸殻を見つけました。

おそらく犯人が吸っていたものでしょう。」

「それはし。RKのメンソールか？息子の祐次が吸っているものと同じだ。

まつまさか??」

「とりあえず息子さんに話を聞いてみましょう。」

2階にあがり息子の祐次の部屋の前に来た。

ノックを何度かするが返事がない。

しかし誰かいる気配はする。

「祐次いるんだろ？話があるここを開けろ！」

まったく開く気配はなかった。

「蹴破りますよ？」

鉄兵はそういつと了解を得る前に扉を蹴破った。

扉は部屋の中に倒れた。

部屋の隅のベッドの上に祐次は震えながらいた。

「かつかつ勝手に入ってくるなよ。」

祐次はおびえていた。

「まわりくどい言い方は嫌いなんで単刀直入に聞くけど、祐次さん、あなたは

お父さんを銃で殺そうとしましたね？」

「なんの証拠があつてそんなこというんだ？」

「一応証拠もありますよ。ほら。」

そついうと鉄兵はタバコの吸殻をだした。

「それだけで証拠になるかよ。」

しかし祐次の顔はミルミル青ざめていく。

「なんでしたらDNA鑑定をしてもいいですけどどうしますか？」

鉄兵がしゃべり終わると同時に祐次は豹変した。

「勝手に部屋に入ってきたと思ったらゴチャゴチャいいやがって。そつだよ俺がやったんだよ。」

毎日のように馬鹿息子馬鹿息子と人前で罵倒しやがって、だから闇サイトで銃を手において殺してやろうと思った。それが悪いか！」

「何だと？ほんとにお前なのか？親を殺そうとするとは・・・馬鹿祐次、三嶋家の恥さらしが！」

三嶋祐三が叫んだあと祐次は行動を始めた。

「また言っ たな？もううんざりだ、死んでくれ親父！」

そついうと祐次はベッドの横にあった引き出しからおそらく祐三を2度狙った銃を取り出した。

鉄兵はズボンのポケットの中にいれておいたパチンコ玉に素早く気を溜め込むと

祐次が銃の引き金を引く瞬間にパチンコ玉を弾き銃口に入れた。

ばーん

「ぐわああああ」

銃口にパチンコ玉が入って銃詰まり暴発し、祐次の手は血まみれになっていた。

「とりあえず救急車を呼びますか？」

数日後、三嶋の暗殺未遂事件は解決をしたが後味が悪かった。

三嶋祐三は

「馬鹿息子を馬鹿息子と呼んで何が悪い！」と最後まで怒鳴っていた。

そして息子の祐次を警察に突き出したそうだ。

「よし、今日も晴天はりきって学校に行くか。」

ブルブルブル

マナーモードにしていた携帯にメールが入った。

また新しい依頼があるという内容だった。

「今度のミッションはもっと楽しいのにしてくれよな。」

鉄兵は今回のことを頭から追い出し学校に向かった。

第一話 憎しみの銃弾 part 5 (後書き)

悲しみの銃弾編 完結です

今後は鉄兵のゴースト退治や

冒険活劇などの話も書いていきますので
よろしくお願いいたします

第二話 密林の虎退治 part 1（前書き）

鉄兵がバイトしている会社は

掃除洗濯の代行から車の修理に浮気調査

更には悪霊退治に暗殺業務まで幅広くなんでも行っ

それぞれの分野にはエキスパートがいて

「ジェネラル」と呼ばれている。

鉄兵も高校生ながら「ジェネラル」の称号をもっている

鉄兵の今日の依頼内容は・・・

第二話 密林の虎退治 part 1

学校に1週間の休暇申請をし、鉄兵は地域紛争が絶えない。国に来ていた。

「このまま仕事で休み続けると出席日数足りずに落第するかもな・
」

「おい、ボケツとするな鉄兵。」

「わかってますよ。」

今回の任務は一人ではなく、元自衛隊陸軍所属だったという齊藤順一（せいとうじゅんいち）と一緒に。
「一と一緒にだ。」

齊藤は今年31歳で、2年前に自衛隊で相当無茶なことをしたらしく除隊になったらしい。

そのことを聞いても話してくれないので何をしたかは不明だ。

自衛隊にいただけあって、銃火器の扱いや、近接戦のスペシャリストで

ジェネラルのランクはAランクだ。

まあ俺自身もランクはAランクだし、銃火器の扱いは一通りできる。

しかし齊藤の銃火器の腕前や近接戦やその場での判断力は凄く
CI。HUNTERの牙羽リョウウといい勝負だろう。

今の俺ではまともに戦っては勝てないと思う。

今回。。国に来た理由は、この国のどこかにアジトを持つという武装勢力「密林の虎」

というゲリラに捕まった日本人観光客の女性 岩田律子（25歳）を助けるためにやってきた。

相手は何人いるかわからず、こちらは2人とかなり分が悪い。

地域紛争の絶えないこの地域で、親を亡くした子供たちの世話などをするために

日本からボランティアで行って捕まったらしい。

国としては、そんな紛争絶えない地域に行くのが悪いと思いつつも世論の反感を買わないように平和的交渉をしているらしいがどうやらうまくいっていないらしい。

そこで国自ら莫大な依頼金を持ってきたというわけだ。

「よし、装備も整ったしいくぞ鉄兵。」

密林の虎がいるという森の手前5キロくらい手前のところで、あらかじめ現地に送っておいた

銃火器を装備した。闇の調達部隊や輸送部隊もうちの会社にはいるらしい。

俺は銃火器の名前などには詳しくないのでわからない。そもそも丸山茂樹が作ったオリジナルの

武器らしいので名前はないのかもしれないが

装備した武器は左右の腰にハンドガンタイプの銃2丁と、後ろの腰

部分には刃渡り50センチほどの

ナイフを1本。ライフルとショットガンを両肩に下げ、リュックの中には弾丸や毛布などを入れている。

ウエストポーチには手榴弾が入っている。

更に丸山が作った額から頬をとおり、顎を覆ったヘッドギアと、肩や胸や腕などを守る防具もつけている。

全て特殊な素材で作られているらしく、警察などが装備しているS & amp; W社製M36リボルバーを元にして作られたニューナンプM60くらいの弾なら撃たれても全く痛みを感じないという。

しかも素材はとても軽くて薄い。ほんとに大丈夫なのか不安だが試す勇気もなかった。

今後はこの防具もパワーアップするらしいが、とりあえず俺には動きやすいこれで十分だった。

斉藤の装備はミネベア 9mm機関拳銃、通称はM9に、ミネベア

9mm自動拳銃、89式5.56mm小銃などを

装備しており、銃について色々説明を聞いたが俺にはよくわからなかった。

どれも陸軍時代に使っていたものらしいが、どうやって持ってきたかは不明だ。

密林に一步足を踏み入れると森中に殺気が満ち溢れているのを感じた。

この森の中全体が密林の虎のアジトのようなものだ。

そしてトラップなども至る所に功名に隠されて配置してある。

それを見つけてしまう斉藤と俺はさすがだ。

「かなり広そうだな。ここからは手分けして探すか。道に迷うなよ鉄兵。」

「斉藤さんこそ迷わないでくださいよ。」

「誰にものを書いてやがる！これからはインカムで連絡を取り合う。」

ヘッドギヤの耳の辺りに付いているスイッチを入れる。

丸山からもらったヘッドギヤについている機能の一つだ。

10キロ以上離れても電波障害などない限り通信できるらしい。

斉藤も同じものをつけている。

「何かあったら呼べ。」

「了解」
うん

「しかし色々作るよな丸山さんも。」

「鉄兵、無駄口は慎め。」

へいへい。

鉄兵と斉藤はそれぞれ別れて密林の中を進むのだった。

第二話 密林の虎退治 part 2

斉藤と分かれてから、鉄兵は密林の中を30分くらい彷徨った。

ゲリラ兵や罨を巧みに避けて人質が捕らわれているはずの密林の虎のアジトを探す。

また目の前に巡回中らしいゲリラ兵が3人歩いている。

木の陰に隠れてやり過ごそうとしたときだった。

「パキッ」

落ちていた木の枝を踏んでしまい音が出てしまった。

ゲリラ兵は音に気づいたらしく何か仲間内でいいながら、銃を構えてこちらに向かってくる。

「馬鹿者だからあれほど気をつけろといったのに」

「パキッ」

「俺もやっちゃった・・・」

斉藤もやってしまい見つかったらしい。こうなればいくしかない。

「なるべく銃を使わず、他の巡回しているゲリラ兵に気づかれないように殺せよ。」

「了解」

銃を使うのは最終手段のため、気を込めたパチンコ玉をポケットから取り出す。

普段より少し気を多めに込めて弾き飛ばせば殺傷能力を持つ。

これなら音はしない。

インカムの音を聞いていると斉藤はどうやらナイフで戦っているみたいだ。

相手に銃を撃たせる前に全て殺しているみたいだ。

あと5メートルというところまでゲリラ兵は迫ってきた。

鉄兵は立ち上がり続けざまに気を込めた3発のパチンコ玉をゲリラ兵の額に向けて飛ばした。

3発ともゲリラ兵が鉄兵に気づき、銃のトリガーを引く前に額を突き破って脳に達していた。

3人のゲリラ兵はその場に倒れた。

「バリッバリッバリッ」

インカムの向こうではマシンガンの音が聞こえてきている。

「思ったより敵の数多くてどじっちゃった。なるべく多くの敵を引き付けるからお前は人質を奪還しろ。」

「斉藤さんは大丈夫ですか？」

「人の心配をしている暇があったら任務の遂行しろ。」

「了解！」

斉藤のことだ恐らく大丈夫だろう。鉄兵はまた密林を歩き出した。

30分くらい歩き続け、ようやく密林の虎のアジトらしき建物を見つけた。

それほど大きくないところを見るとアジトの一つでしかないのであろう。

耳元では相変わらず派手に銃撃戦の音が聞こえる。

早く助けにいかないと斉藤の弾薬が切れてしまう勢いだった。

しかし、そのかいあってかアジトと思われる建物の周りには誰もいなかった。

建物の扉のところまで忍び足でいき、中の音を確認めるが何も音はしなかった。

扉のノブを回すと鍵はかかっておらず開いた。

「キィ〜」

古い扉で開けるときに音がしてしまったが、誰も出てくる気配はな

い。

建物に入るとまず左に風呂と洗面所、右にトイレがあり、更に奥に行く。

左右に扉のついた部屋が6つあった。

手前の扉から順々に中を調べていき、最後の部屋に入ったときようやく見つけた。

椅子に座らせられ体を紐で椅子と固定され、口には猿轡をされている女性。

岩田律子だ。

だいぶやせて、顔や衣服は薄汚れているがまだ生きていた。

そして俺に気づいたらしい。

「もう大丈夫だ助けにきたぞ。」

岩田律子を縛っている紐を解こうとしたときだった。

後ろに人の気配を感じたが遅かった。

第二話 密林の虎退治 part 3 (前書き)

密林の虎退治編最終話です。

武器とかゲリラとかまったく詳しくないのに

書いてみただめだめ作品いかがでしたでしょうか？

第二話 密林の虎退治 part 3

鉄兵の背後にいたゲリラ兵は容赦なく撃ってきた。

「バーン」

よけたら椅子に縛られている岩田律子に銃弾が当たってしまったため避けられなかった。

「ぐう・・・」

ゲリラ兵の撃った銃弾が背中の下のほうに突き刺さる。

よりによって丸山が作ってくれた防具がないところに弾が当たるとはついてなかった。

痛みをこらえながら鉄兵は後ろを振り向いた。

するとゲリラ兵がまだこちらに銃を向けて構えている。

何かをしゃべっているがこの国の言葉はわからなかった。

恐らく「何者だ？手を頭の上にあげる」とでも言っているのであろう。

両手を頭の上にあげるふりをして気を込めたパチンコ玉を勢いよく弾いた。

ゲリラ兵の頭に見事にパチンコ玉は命中し、ゲリラ兵は倒れた。

鉄兵は痛みをこらえながらゲリラ兵が動かないことを確認すると

岩田律子のロープを解いてやった。

「もう駄目だと思った・・・ありがとう」

泣きながらお礼を言われたがこれから逃げなければならない。

岩田律子を守りながらしかも傷を負った俺が逃げ切れるだろうか？

しかし弱音をはいてはいられない。

「よし、では行くぞ！絶対俺の前にはでるなよ。」

岩田律子は涙を拭うとうなずき、鉄兵の後ろに隠れるようにしてついてくる。

「斉藤さん、聞こえますか？岩田律子さんを確保しました。これから脱出します。」

そちらは大丈夫ですか？」

今はインカムの向こうでも銃声がやんでいた。

「かなりやばいが俺は大丈夫だ。お前はその人を守りながら脱出することだけを考える！」

「了解！」

あいかわらずインカムの向こうでは斉藤がゲリラ兵と戦う音が聞こ

えてくる。

しかし鉄兵も斉藤の心配をしている暇がなくなった。

こちらも10人くらいのゲリラ兵に見つかりいきなり銃撃を受けた。

しかし相手の銃の腕や銃の精度がよくかったのと、隠れる場所がいくらでもあったので

隠れながら逃げ確実に一人ずつ殺していった。

10人のゲリラ兵を倒したのもつかの間、また新しいゲリラ兵が10人くらい現れ発砲してきた。

岩田律子の息もあがってきている。

「大丈夫か？」

「ええ、私は大丈夫です。」

岩田律子の顔に疲労の影も見えたが、それよりも早く助かりたいという気持ちのほうが強そうだ。

「しかしきりがないな。」

「文句をいうな！こっちはずっと戦っているんだぞ。」

「へいつへいつ」と心の中で悪態をつきながら鉄兵は銃を使い確実に一人ずつゲリラ兵を葬っていく。

岩田律子もずっと無言でついてくる。

しばらくゲリラ兵を倒しながら元きた道を進んでいくと斉藤の姿が見えた。

「斉藤さん無事でしたか！」

「まあな、何発かもらっちゃったが戦闘には問題ない。」

斉藤の体をみると右肩と左太もみに銃弾を受けたあとが見える。

太もものほうはかすめただけのようだが右肩の出血はひどい。

「鉄兵、少し弾をくれ。俺のはもう切れそうだ。」

マシンガンの弾とハンドガンの弾をいくつか斉藤に渡す。

「もうすぐいくと密林を抜け平地に出ちまう。そうすると隠れる場所がないから

走って一気に駆け抜けるから体力温存しておけよ。」

斉藤はしゃべりながらもゲリラ兵を次々倒していく。

鉄兵も負けずにゲリラ兵を倒していく。

そして先頭を走っていた斉藤が密林を抜けると突然止まった。

俺と岩田律子も密林を抜けた。斉藤が突然足を止めた理由がわかった。

100人くらいのゲリラ兵がこちらに銃を構えて待っていたからだ。

「走って森に戻るぞ。」

しかし、密林の中からも何十人というゲリラ兵が銃を構えて出てきた。

「万事休すつてやつですね斉藤さん。」

「いや、そうでもないみたいです？」

突然ゲリラ兵を囲むようにして何百という。国の軍隊が現れた。

その後ろには戦車や装甲車、空からは武装したヘリなども飛んでいる。

「いちおう保険をかけておいた。間一髪間に合ったようだな。」

。国もゲリラ兵の「密林の虎」には手を焼いていたらしく

一掃したいがどこにいるかもわからず困っていたそうだ。

ゲリラ兵はみな足元に武器を投げ捨て両腕を頭の上に上げて投稿の意思を見せていた。

「なんだあ、軍隊いるなら最初からやってくればいいのに。」

「人質がいたから手が出せなかったそうだ。あとは一気に殲滅させたかったんだろうな。」

ゲリラはどこに出るかわからんから一箇所に集める必要があった。

「

こうして俺たち三人は。国の軍隊に守られながら無事帰国することができたのであった。

第二話 密林の虎退治 part 3 (後書き)

次回はやはり知識がまったくないゴースト退治編をおとどけます

第三話 ゴーストハント part 1 (前書き)

鉄兵がバイトしている会社は

掃除洗濯の代行から車の修理に浮気調査

更には悪霊退治に暗殺業務まで幅広くなんでも行っ

それぞれの分野にはエキスパートがいて

「ジェネラル」と呼ばれている。

鉄兵も高校生ながら「ジェネラル」の称号をもっている

鉄兵の今日の依頼内容は・・・

第三話 ゴーストハント part 1

学校も終わり、校門を出て今日もバイト先に向かう。

昼ごろに携帯に仕事がある旨の連絡が入ったのだ。

「今日もバイトなの？」

校門をでかかったところで声をかけてきたのは同じクラスの皆川結衣^{みながわ ゆい}だった。

学校の中でもかなりのカワイイ部類に入ると思っただが

普段はとてもおとなしく目立たない子だった。

俺は密かに好意を寄せてはいたがしゃべったことは数えるくらいしかなかった。

「ああ、新しい仕事が入ったって携帯に連絡があっただ。これから仕事場について詳細内容を聞きに行くところさ。」

「気をつけてね御剣くん。」

「ありがとう。皆川も気をつけて帰れよ。じゃあな。」

皆川はニコリと微笑むと俺とは反対方向に帰っていく。

ホント守りたくなっちゃうタイプの女の子だった。

皆川と別れると会社に向かった。

会社の玄関から中に入り、1階の受付にいる陽子さんに今日も挨拶をする。

「あら鉄兵くん、お疲れ様。今日も仕事なの？」

陽子さん相変わらず綺麗だ。

「まあね、この仕事好きだから案件いっぱいまわしてもらってるんだ。」

駄目もとで陽子さんを誘ってみようと今日は決めていたので聞いてみる。

「そうだ陽子さん、今度オフの日どこか遊びにいきませんか？」

「うーん、そうね考えておくわ。」

なんとなくあつさりとかわされた気がするが断られたわけではないので

とりあえずその場は引き下がり、仕事の確認のため4階に向かう。

4階につき、周りにいる人に挨拶をしながら共有端末のある席に座り端末にログインして今回の仕事の詳細内容を確認する。

「まっまじかよ。。。」「

思わず詳細内容を見て素っ頓狂な声をあげてしまった。

周りにいた社員たちが奇異な目でこちらを見ている。

しかしすぐにみな自分の仕事に戻っていく。

確かに何でも屋の会社だから色んな仕事があるのは知っていたがほんとにあるとは

思っていなかった仕事内容だった。

昼に携帯にきたメールに仕事内容は「お化け退治」としかかかれていなくて

何かの暗号か冗談かと思っていたらホントに霊を退治する仕事らしい。

「実体がある奴ならどんな奴でも相手をするが実体がない奴が相手かよ・・・」

初めての仕事なのでちょっとパニック状態になっていたら社員の一人が声をかけてきた。

「鉄兵、丸山が今回の任務用の装備があるから地下に来てくれとさつき電話があつたぞ。」

「ありがとうございます。これから向かいます。」

そういつて、地下の研究室に向かうことにした。

しかし霊に効く装備なんてあるのだろうかと思いつつ丸山のいる地下2階に向かう。

地下2階につくと丸山は別の男と話をしていた。

しかしすぐにこちらに気づいたようで手招きをしている。

「鉄兵きたか。」いつもどおり笑顔で話しかけてくる。

すると隣の男も話かけてきた。かなり若い男で俺と殆ど変わらないのではないだろうか？

「キミが鉄兵君か。今回一緒に任務に就くことになった神無月京矢かなづききょうやだ。よろしく。」

自己紹介が終わると神無月は右手を差し伸べてきた。

俺も右手を出し神無月の右手をつかんで握手を交わす。

「こちらこそよろしく願いいたします、御剣鉄兵です。」

「2人は初対面か？京矢はこの若さで日本でも五本の指に入るゴーストハンターだ。」

鉄兵は可もなく不可もなく何でもこなすオールラウンドプレイヤーだな。」

2人を知っている丸山がそれぞれのことを簡単に説明してくれる。

神無月の見た目は全くゴーストハントなどをしそうなカッコではない。

髪は茶髪でメッシュも入り、黒の革のジャケットにズボンといったカッコウをしている。

ピアスやらブレスレットやらウオレットチェーンやベルトまで高そうなシルバーアクセサリを

体中に付け回っている。後で聞いた話だが、ただのシルバーアクセサリではなく

霊退治のときにも使えるものらしい。

「しかしゴーストハントなんてしたことのない俺が大丈夫ですかね？」

「任せておけ。誰でも使える対霊用の武器を色々用意しておいたから大丈夫だ。」

丸山の発明品は殆どのものはハズレがないが、殆どないはずのハズレを何度か引いている

俺は不安でいっぱいだった。

第三話 ゴーストハント part 2

鉄兵は丸山から対霊用の武器をもらったが、どうみても普通の剣や銃に見える。

もっとお札とか聖水とか十字架みたいなものを想像していたが見た目は近代兵器だ。

まずは剣だ。

刃渡り50センチくらいの剣で、重さはとても軽く感じる。

どうやって精製したかは知らないがミスリルでできているらしい。

そして刀身には読めないがなにやら呪文のようなものが彫つてある。

これにより、実体を持つものも持たないものも切り刻めるらしい。

次に銃だが、S & W社のリボルバー型のコルト・ローマンを元に改造してあるらしい。

グリップ部にやはり呪文のようなものが彫つてあり、弾は銀製だが何かに当たると

はじけて弾の中に入っている塩がはじけ飛ぶらしい。

これも実体のあるものにも効くが、実体のないものにも効果があるらしい。

防具は薄い防弾チョッキのようだが、ケプラー素材で作られており、繊維1本1本に霊的防御ができるように呪文が刻まれているらしい。また刃物などによる攻撃には弱いがライフルの弾を喰らっても大丈夫らしい。

まあできれば喰らいたくないものだが。。。

最後に直径10センチくらいの青色の玉を渡された。

使うときはある呪文を唱えながら地面に放ればいいといわれたが

よほどのことがない限り使うなといわれた。

そこまで言うておいて何が起くるかは教ええくれなかった。

神無月は俺以上にいろいろ持ってきているようだが

まあ知らなくてもいいだろう。

「よし、では行こうか御剣くん。」

「鉄兵でいいですよ神無月さん。」

「ん、わかった。じゃあ俺のことも京矢でいいぜっ。」

「わかりました京矢さん。」

一応俺は先輩と後輩のけじめは大事だと思うので「さん」づけにす

る。

まあ、この俺より後輩は後何年かたたないとまずないだろう。

そして今回の依頼内容だが、富野耕三（56歳）という男からの依頼だ。

C県のある町の大地主ということだった。

100年以上も経つ家らしいが、20年くらい前に近くに電車が通るということだ

その電車が通る予定地に土地をたくさん持っていた富野は

高額で土地を売却し巨額の富を手に入れたらしい。

いわゆる土地成金というやつだ。

しかし住んでいる家自体は100年以上そのままの状態だったらしく

最近の地震などで家が傾きだし建て替えることにしたということだ。

しかし工事をはじめた途端に工業者が突然病気や事故にあい全く進まないらしい。

また工業者を替えても同じことが起きた。

そしてそれでも工事を続けようとすると今度はこの家に住んでいた者にも

事故が起こるようになり依頼をしたというわけだ。

漫画や小説の世界ではよく聞く話だが、実際にそういう依頼を受けることになるとは

夢にも思わなかった鉄兵だった。

第三話 ゴーストハント part 3

今回の依頼主の富野耕三には高校生の息子と娘、そして耕三の父母の5人くらいだそう。耕三の妻は数年前に癌で亡くなったらしい。

すでに5人は近くのホテルに一時的に避難している。

俺と京矢さんは地下の駐車場に向かい、俺は愛車のバイクに

そして神無月は丸山に色々カスタマイズされた元はJ e e pチエロキーに乗り込み

C県の富野家に向かった。

J e e pの後部座席には俺が見てもわからない機材がたくさん詰まれている。

明らかに重量オーバーでは？というくらい積んでいるがリヤのサスは沈んでいない。

機材は赤外線カメラやサーモカメラなどだと神無月に聞いたがまあ俺には関係ないだろう。

首都高から東関道に入り、更に一般道を走ること2時間、ようやく目的地についた。

問題の屋敷の前には富野耕三自身が立って出迎えをしてくれていた。

目の下にはクマが出きとても疲れきった顔をしていた。

「今回依頼をされた富野耕三さんですね？」

神無月が形式どおりに依頼者に聞く。

「はいそうです」

とても姿からは56歳には見えない覇気のなくなったその人物から返答があった。

「確かに霊がいますね。しかも大量に。

うーん、しかしこれらはただの浮遊霊っぱいだけだなあ。」

神無月には早くも霊の存在が感じ取れているらしい。

当然ながら俺にはまったく感じない。これで戦えるのだろうか？

「とりあえず家の中を見てみましょう。富野さんは危険なので近くに避難しててください」

い。調査が終わりましたら連絡いたします。いくぞ鉄兵！」

「よろしくお願いいたします。」と頭を下げると富野はそそくさとその場を離れていく。

「ちょっと待ってくださいよ京矢さん。俺には霊を見るとどこか感じることも出来ないん

ですよ？やっぱりむるですよ。」

「大丈夫だよ俺の近くにいれば嫌でも霊の存在を感じたり見たりす

ることが

出きるようになるよ。特に狂暴で強い霊なら尚更だ。」

それはそれで嫌だなあとはいつつ鉄兵は京矢と一緒に屋敷に足を踏み入れた。

確かに屋敷に入ると何も見えはしないが体中が重くだるいような気がした。

ところどころが既に壊されており壁や柱が崩れている箇所もある。

「ふむ、この家は丁度霊の通り道になっていたようだな。しかし今回の工事で

その道が塞がれてしまい、霊が通り抜けられなくなったようだ。そしてその行き場を失った霊がおそらく悪さをしただけだろう。もう一度通れるようにすれば騒ぎは収まるだろう。これならすぐ終わるから

鉄兵はそれまで散歩でもしてていいぞ。」

神無月はそういうと肩から斜めにかけていたバックの中から色々道具をとりだした。

薄気味悪かったが神無月が大丈夫だということで少し気も晴れ、屋敷の周りをみて

回ることにした。

屋敷の裏は都内に住むものから見れば広大な庭になっていた。

そして所狭しと観賞用の松などが綺麗に刈り取られえて植えられている。

また立派な大きな岩などもごろごろ転がっており庭の丁度真ん中辺りには

大きな池もあった。そして中には高級そうな錦鯉が何匹も泳いでいる。

その鯉を眺めていると鉄兵はゾクツと寒気を感じた。

そして誰かに見られているような感じもした。

視線を感じた方向に恐る恐る振り返ってみると、かなり古びた小さな社の

残骸があった。その横にはどうやったのかわからないが横転して胴体の一部が

裂けているシヨベルカーがあった。社はおそらくこのシヨベルカーで壊したのだろう。

もしかすると浮遊霊のせいなどではなく、この社に祀ってあった何かが原因で

今回の事件は起きているんじゃないのか？

鉄兵は神無月を呼びに行くことにした。

第三話 ゴーストハント part 4

家の中にまだいるはずの神無月を呼びに行こうとした鉄兵の背中にとてつもない衝撃が加わり、そのまま10メートルほど吹っ飛ばされ地面を転がり、庭にあった巨大な岩にぶつかってとまった。

額を岩に強打し、割れてしまったようだ。

血が流れ出し方目が流れ出る血でふさがれてしまった。

「ぐう、かなりのお怒りモードのようだな・・・」

背中にくらった衝撃はケプラー素材の防具のおかげでそれほどでもなかったが

岩に頭を強打したせいで、クラクラしていた。

それでも鉄兵は立ち上がると腰に下げてあった剣を抜き放つと上段に構え

見えない何かと対峙する。

すると今度は右わき腹辺りに、猛スピードで突っ込んできた車のような衝撃を受け

またもや鉄兵は10メートルほど吹き飛ばされる。

「つぐう・・・」

武器となる剣は手放さなかったのは流石だが、今の衝撃であれば何本かいったようで

鉄兵は立ち上がると同時に鋭い痛みが全身にいきわたる。

何もしていないのにもう立っているのが精一杯な感じだった。

「人生最大のピンチかも。。。」

「それだけ無駄口をたたけるんだったらまだ大丈夫だぞ鉄兵。」

神無月がいつのまにか外に出てきており

右手に持った小さな石のようなものを自分の顔の前に掲げ

何やら呪文のようなものを唱えていた。

そして鉄兵の１０メートルくらい前のところに投げつける。

すると小さな石は砕け散り鋭い閃光があたりを包み込み、それと同時に

この世のものとは思えない甲高い叫び声が聞こえた。

「ちっ逃げられたか。大丈夫か鉄兵？」

どうやらその何かは逃げ去ったらしい。

「何とか・・・しかし死ぬかと思いましたよ京矢さん。」

神無月が手を貸してくれ、鉄兵は何とか家の縁側まで連れて行かれ腰を下ろす。

「痛い」

座ったときにあばらに衝撃が走り痛みが鉄兵を襲う。

「あれはキツネか何かの動物が何年も生きて神になった低級な神だな。」

しかし頭がないぶんパワーがあるから気をつけるよ。」

「遅いですよいまさら。。。やはり俺には無理ですよ。」

「お前はやつに見られたからな、逃げてもおいかけられまた襲われるぞ。」

大変だがここで決着をつけるんだ。」

「まあ乗りかかった船なんで逃げる気はないですけどね。」

鉄兵は後に備えて簡易的に額やあばらの治療を行い、痛み止めの注射を打つ。

「うん？」

「どうした鉄兵？」

「いや、先ほどのやつとは違って何かまだ他にいるような感じがしたんですが」

気のせいでしょうか？」

「俺には何も感じなかったが、あまり強くない霊だろう。俺も弱い霊だと波長が

あわないと殆ど見えないからな。」

「そうですか・・・」

気のせいだったかも知れないが鉄兵は先ほどのものとは違い

何か温かいものを感じたような気がした。

第三話 ゴーストハント part 5

先ほどの戦いから数時間がたち、時間は深夜0時を少し回っていた。まだあばらは傷むが痛み止めの注射のおかげで動けなくなかった。先ほどまで鳴いていた虫の声や吹いていた風が突然やんだ。

そして口では言い表せない黒くモワツとした感じがあたりを包みだした。

「おいでなすつたぞ鉄兵！」

俺は丸山さんが作った特殊なゴーグルをセットする。

実体がないものでも熱や光などのエネルギーや、空気の動きなどから形を作ってそこに存在するかのように見せてくれるというゴーグルだ。

庭に立ち剣を構えている俺と、やはり今回は剣を構えている神無月の目の前に

体長5メートルはありそうな大きな光の物体が現れた。

確かにその形はキツネにみえなくもない。

少しゴーグルを上にはずしてみるが肉眼では何もみえず、やはりゴーグルごしにしか

見えないようだった。

しかしそいつから伝わってくる殺気のようなものはゴーグルがなくとも

ピンピンと伝わってくる。

「姿が見えれば怖くない。いくぞ！」

痛み止めを打った分、少しからだが麻痺した感じだが

俺はいつもと同じかそれ以上のスピードでそいつを剣で切り裂こうとしたが

体が大きいので動きが鈍いと思いきや予想に反して素早い動きで

簡単によけられてしまい鉄兵の剣はむなしく宙を切り裂いただけだった。

そして鋭い一撃が鉄兵の左わきからくるが間一髪のところによける。

少し間合いを取りなおし鉄兵は剣を構えなおす。

「鉄兵、1分間だけそいつの相手を頼む。この呪文が完成すればやつは動けなくなる」

「了解！」

鉄兵は一度剣を左の腰の鞘に収めると、右の腰のホルスターにさし

てあつた銃を引き抜くと

そいつに向かつて銃を立て続けに3発放った。

2発は完全に交わされたが1発だけそいつにかすり、かすった部分だけそいつの体が四散した。

しかしすぐにまた集結すると怒り狂ったように鉄兵に突進してくる。

ドカッ

鉄兵は避けきれずまともに体当たりをくらい宙高く放り上げられ地面にたたきつけられた。

倒れて動けない鉄兵に容赦なくそいつは襲い掛かってくる。

倒れながらも鉄兵は残りの銃弾をすべてそいつに向かつて撃ち込んだ。

全ての銃弾が命中しそいつは跡形もなく消え去った。

「やったぜ！」

鉄兵がそう思った瞬間倒れていた鉄兵の地面が盛り上がりまたもや空高く吹き飛ばされた。

ドスッ

「ぐはっ」

鉄兵は地面にたたきつけられた衝撃で大量の血を吐いた。

「大ピンチ・・・」

そいつはいつの間にか鉄兵の丁度真上あたりにおり、鉄兵めがけて鷹が獲物を狙うかのごとく凄まじい勢いで突進してくる。

「待たせたな撤兵、後はまかせろ！」

第三話 ゴーストハント part 6

「またせたな鉄兵」

神無月が呪文を完成させた。

「消滅しろ！」

神無月は両腕を胸の前で一旦クロスさせると

両腕から七色の光を放ちだし、その両腕をそいつに向かって突き出した。

すると七色の光がそいつに向かって飛んでいくと至近距離で雷が落ちたような

凄まじい音とともにそいつの体は消えた。

「やった・・・」

「すまん遅くなって、大丈夫か鉄兵？」

神無月は鉄兵を優しく起こしかける。

「大丈夫じゃないですよ、危うくお陀仏に・・・あぶない！」

そいつはまだ死んではいなかった。

鉄兵を抱え起こす神無月の背後から体当たりをかまされ2人は地面

に倒れこんだ。

「くっ低級といえどもさすが神のことだけはある・・・」

そいつは先ほどより更に強い光を発し、声とも音とも取れない何かを発しだした。

「鉄兵、このままだと二人とも死んでしまう。丸山さんからもらったアレを投げろ。」

しかし鉄兵は度重なる攻撃で失神してしまったのか返事がなかった。

「鉄兵、起きろ！鉄兵！」

神無月が必死で鉄兵を呼びかけているころ、鉄兵は夢なのかあの世なのか

よくわからない全てが真っ白の世界に一人横たわっていた。

そしてどこか優しく温かいものが鉄兵を包み込んでいた。

「母さん・・・」

そこで鉄兵は目が覚める。

神無月が鉄兵に向かって何かを叫んでいる。

「鉄兵、丸山さんからもらった青い玉をやつに向かって投げろ！」

「神無月さん・・・わかりました。」

鉄兵は最後の力を振り絞りズボンのポケットの中に入っていた青い玉を取り出すと

丸山に教えてもらった呪文を唱え、猛り狂ったそいつに向かって投げつけた。

するとその玉は弾け、中から身長２メートルはありそうな

古い中国風の鎧を着た石の猿が出てきたのだった。

「我が名は斉天大聖。盟約によりお前を一度だけ助けてやる。」

斉天大聖、すなわち西遊記でお馴染みの孫悟空が現れたのだった。

鉄兵はあまりにも現実離れた展開についていけず呆然としてしまった。

「鉄兵何をしている、斉天大聖にその化け物を倒すように言え！」

現実に戻った鉄兵は神無月にうなずき早速斉天大聖に言う。

「斉天大聖よその化け物を倒してくれ・・・頼む」

「承知した」

第三話 ゴーストハント part 7

齊天大聖は鉄兵の望みを聞くと背中から恐らく如意棒を引き抜き
凄まじい勢いでその化け物に向かって如意棒を振りおろした。

ほんとに一瞬だった。

鉄兵と神無月があれだけ苦戦したやつを一撃で葬り去ったのだ。

「望みはかなえたさらばだ」

そついうと齊天大聖はその場から消え、消えた足元には石で出来た
毛が数本落ちていた。

鉄兵は今の光景が今だ信じられず呆然としていた。

「俺も詳しくは知らないが、社長と齊天大聖は何らかの因果関係の
ようなものがあると

聞いたことがある。それで齊天大聖の分身を封じ込めた石をいく
つか持っているようだ。」

鉄兵はよく考えたら親戚でありながら社長の神埼純のことを何も知
らないことに

いまさらながら気づいた。

まあそれはさておき

「初めから使えば一瞬で終わっていたのに知っているならどうして使わなかったんですか？」

「バカヤローおいそれと斉天大聖の分身を使えるわけないだろう？今回だって社長が

お前の身を案じてひとつくれたんだぞ。俺だけだったら絶対くれなかった。」

鉄兵は複雑な気持ちだったが、それでも最初から使えばよかったのにも思った。

「けどあの戦いの中でも温かい……そう母親のような存在を感じたんですが

なんだっただんでしょう？」

鉄兵は夕方に社のところで感じたものと夢のような世界で感じたあの温かい感じを

いまだに忘れられなかった。

「うーん、その人が現れたみたいだぞ。」

二人が倒れている目の前に、とても温かく優しい光が現れた。

40代くらいの女性のようだった。

そして二人に語りかけてきた。

「私は4年前に亡くなった富野の妻です。

実は社の近くに戦時中の不発弾が眠っており、爆発する危険があ

りました。

そのため私は工事をやめさせようと必死に訴えようとしたのですが夫や工事業者には伝わらず、そのうち先ほどの化け物を祀っていた社が壊され

それで怒った化け物が皆を攻撃しだしたのです。

私は止めようと思いましたが逆に取り込まれてしまい何も出来ませんでした。」

「そんなことはありませんよ。少なくとも俺はあなたのおかげで力を取り戻し

あの化け物を倒すことが出来たんですから。」

「鉄兵さんありがとう。そういつていただけると助かります。

申し訳ないのですが、工事を再開するのは不発弾を処理してからにするよう

夫に伝えてもらっても宜しいでしょうか？」

「お安い御用です。必ず伝えます。」

「ありがとう」

そういうと富野の妻は安心したのか笑顔を残してその場から消えていった。

「鉄兵が感じた温かく優しい感じとは、母親であり妻であるあの女性の愛情だったんだな。」

「そうですね京矢さん。」

幼いころに両親をなくし、愛情を殆どもらうことなく生きてきた鉄

兵は

死んでもなお家族を守ろうとした母親の愛情が羨ましくもあった。

次の日、二人は体中の痛みを推して富野に今回の事件のことについて語った。

富野耕三や子供たちはそれを聞いて泣いていた。

その後二人・・・特に鉄兵は怪我が酷い為、即入院となった。

鉄兵自身が体を鍛えていたことと、丸山が作ったケプラー素材の防具を着ていたため

額を数針縫ったのと、あばらの骨にヒビが入っていたのと、各所の打ち身と捻挫だけで

済んだので数週間後には退院することが出来た。

鉄兵は病院を出て久しぶりに薬くさくない空気を吸うため深呼吸をしていると

目の前に見覚えのあるJeep Cherokeeが止まった。

ウィンドウが下がり鉄兵より先に退院した神無月が顔を出す。

「よっ！退院おめでとう。家まで送るよ乗れよ。」

確かに何週間も寝てすごしていたので少しクラクラする体にはあり

がたく

お言葉に甘えて助手席に乗せてもらった。

「しかし今回の事件は大変だったけど楽しかったな。

また一緒にゴースト退治しようぜ？丁度今いい案件があるんだ。」

「京矢さん、しばらく簡便してくださいよ。。。」

鉄兵を乗せたJ e e pはフル加速して街中に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4762f/>

ジェネラル

2010年10月9日11時36分発行